

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん ちようこく ぶつぞう
平成知新館1F-1(彫刻)の「仏像入門」について勉強してみよう。

ぶつぞう
仏像は何からつくられて
いるの？

ぶつぞう こんじき かがや きんぞく
仏像は金色に輝いているものも多いので、金属からつくられていると思う人が多いかもしれません。たしかに銅の表面に金メッキを施したのも、古代を中心につくられました。しかし、国のおおよそ3分の2の面積を森がしめている日本では、木からつくられたものが圧倒的多数です。一方、日本以外の国々、たとえばお釈迦様のふるさとインドをはじめ、中国や朝鮮半島では石の仏像がたくさんつくられましたが、日本ではあまり流行しなかったようです。このほか奈良時代には、中国・唐時代の影響を受けて、漆や土を素材とした仏像も流行しました。「えっ、土から仏像をつくるの！」と驚いた人がいるかもしれませんが、国宝の仏像にも土でつくられたものがあります。

では今日は、仏像にはどんな素材がもちいられているのかをみてみましょう。

【石】

図1はガンダーラでつくられた仏像の頭部です。とてもかたい石からできているので、つくられた時の形がしっかりと残っています。このように、仏像が誕生したパキスタンのガンダーラ地方やインドのマトゥラー地方、さらには中国や朝鮮半島では、石の仏像が数多くつくられました。ところが日本では石でつくられた仏像が流行する時期は、とても限られています。源平の合戦で被害を受けた奈良の寺を復興するため、中国から多くの技術者がまねかれた鎌倉時代はそのひとつです。東大寺南大門の有名な仁王像の裏側には、大きな石の獅子像がありますので、ぜひ振り返ってみてください。

【銅】

ぶつきよう どうせい ぶつぞう
仏教が伝来した6世紀から8世紀ころにかけては、銅製の仏像が流行します。とくにお寺の中心となるご本尊さまは、銅でつくるのが基本でした。また、個人むけの小さな仏像も銅でつくられました。銅といっても錫や鉛が混ぜられていて、その表面に金をうすくメッキして光り輝かせています。金色は仏さまのからだ光り輝いていることをあらわしています。今でも金はいへん貴重ですが、昔の人もわずかな金を大切に使うために、メッキという技法が用いられたのです。

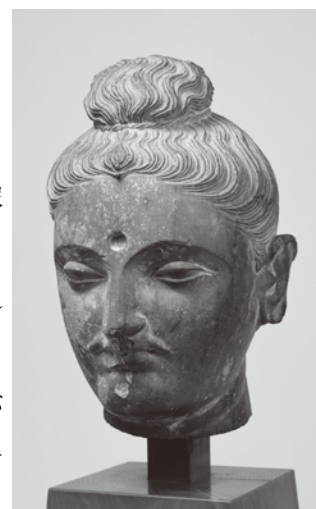


図1 如来頭部
パキスタン ガンダーラ(2~3世紀)
京都国立博物館蔵

